

## 質問改善

授業後、学生は少人数グループに分けられ、他の学生が提出した批判的質問を渡される。あなたたちの課題は、それらの質問を修正し、できる限り哲学的に実りある議論につながるよう改善することである。結局のところ、質問が良ければ良いほど、議論も良くなる。

重要：あなたたちの課題は、与えられた質問に答えることではなく、あくまで「質問として改善すること」である。

この課題では、以下の手順に従うこと。

- 与えられた質問の中から二つ（そして二つだけ）を選ぶこと。
- 現在の質問の立て方や表現にどのような問題があるかを特定すること。
- その問題がどのような性質のものかを説明すること。
- それらの問題を取り除くように質問を書き直すこと。
- あなたたちの修正版が、どのように問題を解決しているのかを説明すること。

以下は、あなたたちが遭遇するかもしれない問題の一覧である。ただし、これは完全な一覧ではない。このリストにない問題について議論してもよい。質問を評価する際の基本基準は、「この質問は哲学的に実りある議論につながるか」である。その目的をよりよく達成するために改善できる点があるなら、それは指摘する価値がある。

とはいえ、最初はずまず以下のリストに挙げられている問題を明示的に用いることを強く勧める。この活動に慣れてきたら、それを超えて考えてよい。

重要：提出前に、質問は必ず変更しなければならない。また、その変更は些細なものではなく、内容的な変更でなければならない。完璧な質問というものには存在しない。どんな質問でも、何らかの形で改善することができる。

## 単なる意見調査

ある話題について人々がどう考えているかを尋ねるだけの質問は、哲学的議論には適していない。そのような質問は、哲学的な議論や概念を検討する代わりに、人々がたまたま何を考えているかへと焦点を移してしまう。しかし、人々が実際にどう

考えているかという事実は、その考え方が正しいか間違っているかとは無関係である。よくても推測を招くだけであり、悪ければ哲学を社会学に置き換えてしまう。

### 生産的でない質問

- 「死刑について、大多数の人はどう考えているのか？」
- 「なぜ人々は AI が意思決定を行うことに不安を感じるのか？」

### 改善後の質問

- 「死刑を支持するためによく用いられる道徳的理由にはどのようなものがあり、それらはどの程度強力か？」
- 「AI システムが人々の生活に影響する決定を行うとき、どのような倫理的懸念が生じるのか。また、それらはどのように評価されるべきか？」

### 実証的質問

ある種の質問は、「あるものが別のものを引き起こすのか」や、「ある政策が特定の効果を持つのか」といったことを問うている。しかし、そのような問いに責任ある形で答えるには、授業内では利用できない実証的証拠・データ・専門知識が必要になる。その結果、議論は推測的になったり、逸話的なものになったり、根拠のない前提に依存したものになりやすい。哲学的議論は、議論そのものによって確立したり前進したりできない実証的事実を確定することに集中すべきではない。

### 生産的でない質問

- 「より長い刑期は、本当に犯罪を減少させるのか？」
- 「ソーシャルメディアは、人々をより政治的に過激にしているのか？」

### 改善後の質問

- 「もし長期刑が犯罪を減少させないことが示されたなら、それは刑罰政策にどのような道徳的含意を持つのか？」
- 「もし政治的分極化がソーシャルメディアによって引き起こされているとしたら、なぜそれは道徳的に問題なのか。また、その懸念はどの程度重視されるべきなのか？」

## カテゴリーの混同

ある質問は、異なる種類の問題を曖昧に混ぜ合わせてしまっており、実際に何が問われているのかが不明確になっている。よくある混同としては、道徳的義務と法的権利、正義と慈善、個人の義務と国家政策、理想的原理と現実的実装などがある。カテゴリーが混同されると、参加者は互いに噛み合っていないまま議論を進めることになり、有意味な前進ができなくなる。

## 生産的でない質問

- 「国家は国境を管理する権利を持つのか？」
- 「言論の自由は正当化されるのか？」

## 改善後の質問

- 「国家は、単なる法的権力ではなく、道徳的権利として国境を管理する権利を持つのか？」
- 「言論の自由は、法的保護や社会的有用性とは別に、道徳的に正当化されるのか？」

## 結論の先取り

ある質問は、その問い方そのものによって、すでに特定の道徳的結論を前提してしまっている。感情的に強い言葉や、一方的な記述、価値判断を含んだ表現は、議論が始まる前に結論を決めてしまうことがある。良い哲学的質問は、たとえ話題が感情的・政治的に強いものであっても、道徳的結論を開いたままにしておくべきである。

## 生産的でない質問

- 「自分では制御できなかった行為について、人を罰するのは間違っているのか？」
- 「なぜ労働者を搾取することは道徳的に許されないのか？」

## 改善後の質問

- 「行為に対する制御の欠如は、どの程度まで道徳的責任を弱めるのか？」
- 「どのような条件のもとで、不平等な交渉力は雇用関係を道徳的に問題あるものにするのか。もしそうした条件が存在するなら、それはどのようなものか？」

### 分析水準の混同

ある質問は、問題をどの水準で考えているのかを明確にしていない。個人、国家、グローバルなシステムの間を曖昧に行き来してしまうのである。分析水準が不明確なままだと、参加者は表面的には意見が対立しているように見えても、実際には異なるレベルの問題について話しているだけ、ということが起こる。

### 生産的でない質問

- 「私たちには気候変動に対処する義務があるのか？」
- 「嘘をつくことは間違っているのか？」

### 改善後の質問

- 「気候変動に対して、国家や企業ではなく、個人にはどのような義務があるのか。もしあるとすれば、それはどのようなものか？」
- 「嘘が道徳的に間違っているのは、個人による場合なのか。それとも、その問題性は主として法律や証言のような制度的文脈において生じるのか？」

### 実行可能性

ある質問は、提案が道徳的に正当化されるかではなく、それが現実的あるいは実行可能かどうかには焦点を当ててしまっている。その結果、実行可能性が道徳的考慮として扱われているのか、それとも単なる前提条件として想定されているのかが不明確になる。良い議論のための質問は、実行可能性がどのような役割を果たすべきなのかを明確にするのであって、それを道徳的議論の代わりにしてしまわない。

### 生産的でない質問

- 「人々に利他的行動を期待するのは現実的なのか？」

- 「ユニバーサル・ベーシックインカムは現実的なのか？」

### 改善後の質問

- 「個人の行動に対する道徳的要求を評価する際、実行可能性はどのような役割を果たすべきなのか？」
- 「もしユニバーサル・ベーシックインカムのような政策が道徳的には正当化されるとしても、実装が困難である場合、そこから何が導かれるのか？」

### 誤った二分法

ある質問は、実際には混合的・条件的・閾値的な立場が可能であるにもかかわらず、利用可能な立場が二つしかないかのように前提してしまっている。このような人工的な選択の強制は、議論を狭め、哲学的に興味深いより微妙な立場を見えにくくしてしまう。

### 生産的でない質問

- 「刑罰は復讐のためのものなのか、それとも抑止のためのものなのか？」
- 「道徳的行為は理性によって動機づけられるのか、それとも感情によって動機づけられるのか？」

### 改善後の質問

- 「刑罰はどのような異なる目的を果たしうるのか。また、それらの目的が衝突する場合、どのように調整されるべきなのか？」
- 「理性と感情は、それぞれどのような形で道徳的動機づけに関与しうるのか？」

### 定義だけを求める質問

ある概念が何を意味するのかだけを尋ねる質問は、持続的な哲学的議論につながることが多い。もちろん定義は重要である。しかし、単に定義を尋ねるだけでは、何が問題になっているのか、あるいは異なる解釈がなぜ重要なかが示されていない。優れた議論のための質問は、定義を超えて、その概念を試したり、異なる理解を比較したり、その理解から何が導かれるのかを問うたりする。

## 生産的でない質問

- 「正義とは何か？」
- 「自律とは何を意味するのか？」

## 改善後の質問

- 「異なる正義観は、刑罰に対する評価をどのように変化させるのか？」
- 「もし自律が自らの欲求を反省的に検討する能力を必要とするなら、それは同意を評価するうえでどのような含意を持つのか？」

## 単なる賛否表明

ある質問は、主として参加者に「賛成か反対か」を表明させることを目的とした形になっている。そのような質問は、良いクラスでは議論を引き起こすこともあるが、参加者に理由を明確化したり、対立する立場と向き合ったりする圧力をほとんど与えない。より強い質問は、個人的な賛否から離れ、議論の構造や、その評価へと焦点を移す。

## 生産的でない質問

- 「嘘をつくことは、時には許されると思うか？」
- 「私たちは人工知能を心配すべきなのか？」

## 改善後の質問

- 「どのような条件のもとで、嘘は道徳的に正当化されうるのか。また、その判断を支える原理にはどのようなものがあるのか？」
- 「人工知能に関連するどのような種類のリスクが、本当の道徳的懸念を生み出すのか。また、それはなぜか？」

## 動機づけのない仮定事例

仮定的事例 (hypothetical cases) は哲学では一般的だが、それだけで自動的に議論を改善するわけではない。明確な目的なしに仮定事例が導入されると、議論は哲学的分析ではなく、想像的な思弁へと流れてしまうことがある。良い質問は、その事

例のどの特徴を検討しているのか、そしてその仮定事例がより広い問題や原理とどう関係しているのかを明確にする。

### 生産的でない質問

- 「誰も嘘をつかない世界を想像してみよう。その世界はより良いものだろうか？」
- 「もし人間が永遠に生きられるとしたら、それは良いことだろうか？」

### 改善後の質問

- 「もし嘘をつくことが不可能になったなら、現在『真実を語ること』が果たしている道徳的機能のうち、どのようなものが失われ、どのようなものが維持されるのか？」
- 「もし人間の寿命が無期限に延長されたなら、『有限性』に結びついたどのような道徳的価値が、もしあるとすれば、揺らぐことになるのか？」

### 構造化されていない対立

ある質問は、対立を引き起こすこと自体はできても、「どこで」「なぜ」対立が生じるのかを示していない。その結果、議論は互いに反対の答えを並べるだけになり、その背後にある対立理由を明確化できないまま終わってしまう。優れた哲学的質問は、合理的な対立がどこで生じうるのかをあらかじめ見据え、単なる主張の応酬ではなく、競合する考慮事項を検討できるように問題を構成する。良い質問とは、概念がどこで破綻するかを検討することで、その概念に圧力をかける質問である。

### 生産的でない質問

- 「テクノロジーは社会を良くしているのか、それとも悪くしているのか？」
- 「道徳的責任は本当に存在するのか？」

### 改善後の質問

- 「ある技術が大きな利益をもたらす一方で、予測可能な害も生み出す場合、その使用が道徳的に許容されるかどうかは、何によって決定されるべきなのか？」

- 「ある行為者の行動が、その人の制御を超えた要因によって大きく形作られている場合、それでもなお、その人はどの程度まで道徳的責任を負うべきなのか？」